

SPF
グローバル・ブックス

華僑・華人経済

日本・アジアに
どんな影響を及ぼすか

游仲勲

華僑・ 華人経済

JP
グローバル・フックス

日本・アジアに
どんな影響を及ぼすか

游仲勳 編著

8
夕草毛印社

編著者紹介

游 仲勲 (ゆう・ちゅうくん)

1932年台湾・台北市生まれ。60年神戸大学大学院経済学研究科博士課程修了。熊本商科大学経済学部教授を経て、82年から国際大学大学院国際関係学研究科教授。その間学長事務取り扱い(当時大来佐武郎学長)その他を兼務。94年4月より亜細亜大学国際関係学部教授。経済学博士。

著書に『華僑』(講談社現代新書)、『華僑は中国をどう変えるか』『華僑はアジアをどう変えるか』(PHP研究所)、『華人経営者の素顔』(時事通信社)、編著書に『世界のチャイニーズ』(サイマル出版会)他多数がある。

華僑・華人経済

——日本・アジアにどんな影響を及ぼすか——

1995年11月30日 初版発行

編著者／游 仲勲

©1995 Yu Chukun

装丁／海野幸裕

印刷／松濤印刷

製本／山田製本印刷

発行所／ダイヤモンド社

〒100-60 東京都千代田区霞が関1-4-2

電話／03-3504-6403(編集)03-3504-6517(販売) 振替口座／00190-6-25976

ISBN4-478-29037-7

落丁・乱丁本はお取り替えます

Printed in Japan

はしがき

アジア経済の発展が目覚ましい。だが、そのアジア経済のなかでは、陰の実力者としての中国系諸経済の発展がとくに顕著である。ここで「中国系諸経済」とは、中国大陆、香港、マカオ、台湾、および海外華僑・華人の諸経済をいう。こうした中国系人の諸経済、略称して中国系（諸）経済が一つにつながりだした。

かつては内戦まで経験した中国共産党・国民党間の対立・憎悪、いいかえれば大陸・台湾間の対立・憎悪がすべての中国系経済にまでもち込まれ、中国系諸経済は真つ二つに分断されていた。それがポスト冷戦の中国大陆および台湾双方の政策大転換によって、加えて香港の中国復帰の決定などもあって、中国系諸経済が一つに結びつきはじめたのである。

その結果、中国大陆外の香港、マカオ、台湾、および海外華僑・華人の資本が中国大陆に流入し、大陸経済の発展に大きく貢献するに至った。こうした大陸外の中国系外資を「大陸外中国系資本」あるいは「大陸外中国系外資」、また大陸外の中国系人を「大陸外中国系人」と略称することができるといえる。

他方、中国大陆のそれも含む中国系外資や人が東・東南アジアだけでなく、南アジアにも膨張しつつあり、さらにはアジアだけでなく、アジア太平洋地域全域で、あるいはもっとと広く中央アジア、ロシア、東欧、西欧、ラテンアメリカ、アフリカ、オセアニアなど全世界で活動を広げつつある。

こうした中国系諸経済の発展は各国・地域・民族ないしエスニック・グループと競合・摩擦を生じさせつつある。今後このような競合・摩擦がますます激しくなっていくものと思われる。これは民族問題ないしエスニック問題である。同時に注目されるべきは、中国系諸経済同士のあいだでも競合・摩擦が生じており、激化しつつあることである。

このような中国系経済とのかかわりは日本にも及ぶ。今後、多くの中国人・中国系人が日本にくると覚悟しておいたほうがよい。中国系外資もくるだろう。また、中国大陸経済の発展が日本の将来に大きな影響を及ぼす。中国系経済全体との深いかかわりなしには、将来の日本の発展もありえない。本書は中国系諸経済がどのように発展しつつあり、どのようにに経済力を拡大・膨張させつつあるか、どのような変化が進行中であるか、それが日本の運命とどうかかわるかなどを、いろいろな角度から明らかにしようとした一つの試みである。

ただし、「中国系諸経済」の語が日本ではまだ市民権を得ていないことから、本書の書名は『華僑・華人経済』とした。「中国系諸経済」の意である。

新しいアジア太平洋の時代がきつつある今日、私たちは真剣にアジアに目を据えて、もっとアジアのことを知る必要がある。

だが、いったい日本人はどれほどアジアを正確に理解しているだろうか。企業がアジアにでていくにしても、どれほどアジアのことを理解しているだろうか。アジアの事柄のなかでも、とりわけ正しく理解されていないことの 하나가、華僑・華人、さらには中国大陸、香港、マカオ、台湾を含めた中国系人全体、とくにその経済の変化である。

これは日本人だけに限らないことなのだが、華僑・華人のことが正確に知られないのは、一つには彼らの圧倒的多数が居留国の国籍をもち、統計をいじくつてもなかなか彼らのことがわからないうという事実からきている。統計のほとんどが民族別・エスニック別ではなく、国籍別だからである。また、抑圧されることを嫌って、彼ら自身が中国系であることを隠すということもある。本書で以下に明らかにされるのが、華僑・華人に対する日本人の正確な理解に貢献できるとすれば、これにすぎない喜びはない。

なお、最近では華僑・華人関係の書物が出版ラッシュである。本書の執筆者はいずれもこのテーマについての第一線級の研究者であり、引つ張りだこの執筆者である。編者の場合でも若干他とのダブルリを避けるわけにはいかなかった。本来ならばダブルのところは省いて、新しいところだけを記せばよいのかもしれないが、これについてはこの本参照、あれについてはあの本参照というわけにもいくまい。本としての体裁上、一応はふれざるをえなかった。ただ、その場合でも新しい事実で補ったり、新しい論点を追加したり、最善の努力はしたつもりである。

なおまた、日中両国にもっとも近い国である韓国（大韓民国）、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の華僑・華人経済、さらには広く中国系経済との関係も重要である。本来の予定では、日本および朝鮮半島については他の執筆者が担当するはずであったが、健康上の理由で果たせなくなった。かわって編著者が日本を担当した。朝鮮半島については他日を期したい。

本書ができあがるについても、多くの方々のご援助を得た。とくに、本書は笹川平和財団・日中友好基金の中国華僑動向調査委員会のメンバーによって執筆されており、こうした研究成果を得られた

のも同委員会の研究会、またその機会をつくってくださった同基金のお陰である。特記してお礼申し上げたい。とりわけ、研究会の開催から本書の出版に至るまで、種々の事務を担当してくださった同基金事業室の市村保夫室長はじめ、窪田新一（執筆者でもある）、藤波晴子、岡室美恵子、顧文君、于展の皆さんに感謝したい。

末筆となったが、本書の出版に際しては、ダイヤモンド社の福田辰雄さんにもたいへんお世話になった。とくに、約束の期限がすぎで随分経ったのに、じっと待ってくださったことに対しても、深く感謝したい。

一九九五年秋

編著者



目次

はしがき i

序章 アジアの時代における中国系人と日本

世界文明の中心としてのアジア、そして中国と日本／2

日本のアジア理解と華僑・華人／3

中国系の人口／6

華僑論的華僑・華人研究と華人論的華僑・華人研究／9

第1章 中国系諸経済と中国系外資の動向

1 中国系諸経済の発展とその一体化・競合

14

中国系諸経済の発展と東・東南アジア経済結合の新段階／14

中国系NIESのリージョナル・センター化／16

中国系人を通じる東・東南・南アジア経済の一体化へ／18

中国系経済同士の競合・摩擦／19

2 中国系外資のあらたな動き

21

四段階にわたる中国系外資の動き／21

大陸外中国系外資による対中投資の模様眺め／23

大陸外中国系外資による対中投資の展望／24

中国系諸経済、とくに資本のあらたな対外的動き／26

第2章 新移民と華僑送金

1 新華僑の出現

30

移民の推移／30

新移民とアメリカ移民／33

2 華僑送金

36

華僑送金額の推移／36

「海外関係」による国内親族への迫害と華僑送金／40

改革・開放後の変化／41

華僑送金管理と贈与／43

第3章 中国本土系企業経営の国際化と華人系資本

1 中国本土に集中投資する華人系資本 48

華人系投資の特徴／48

企業買収のあらたな動き／50

2 本土系資本の海外進出 54

香港における中国本土系企業の動き／54

ケーススタディ・華潤集団／57

シンガポールへの進出／61

3 中国本土系企業の海外直接上場 63

国有企業の海外上場に至る経緯／63

海外直接上場／65

香港を媒介とする華人系資本と本土系資本／67

第4章 「兩岸」経済関係の進展と台湾の「南向政策」

●華僑・華人の「兩岸」像から

1 華僑・華人の研究と台湾 70

2 華僑・華人の「兩岸」認識

72

3 台湾の「南向政策」の展開

79

「兩岸」経済関係の重層化／80

「南向政策」の展開／82

4 華人社会の「汎政治化」と「親華」「脱華」のジレンマ

88

第5章 モンゴルと中国、北東アジア

1 モンゴルの現状

94

2 モンゴルと中国、中国人、中国資本

96

3 中国・内モンゴルへの華人投資と経済概況

103

4 モンゴルと北東アジアの中国人

108

第6章 西南経済区と黄金四角経済区

●あらかな経済圏と華人

經濟圏構想の背景と意味／114

1 大西南經濟開發から西南經濟区開發へ

117

大西南地區開發と黄金四角經濟区／117

亞洲西南大陸橋構想／120

2 タイ側の対応と「グループ・オブ・メコンリバー」構想

126

3 西南經濟区と黄金四角經濟区へのタイ華人の対応

130

タイ政府主導の地域開發への思惑／130

地域開發をめぐる大きな流れ／135

第7章 シンガポール・マレーシアの華人資本

● 國民經濟と投資活動

華人資本の実像／138

1 國民經濟と華人資本

139

シンガポールの外資依存型工業化と華人資本／139
マレーシアの「ブミブトラ」政策と華人資本／141

華人の対応 / 145

2 華人資本の投資動向

147

国内市場における投資動向 / 147

海外投資——ホンリヨン・グループの事例 / 150

華人資本の行方を考える / 155

第8章 マレーシア、香港、インドネシアの中国系財閥

1 マレーシアの華僑・華人企業

160

華僑・華人の政府への協力 / 160

華僑・華人企業の投資 / 161

2 香港の財閥

164

合和(ホープウエル)の場合 / 164

国際金融機関も協力 / 166

3 インドネシアの財閥

169

金光王国の場合 / 169

金光グループと製紙業 / 171

終章 中国系経済と日本

1 近くて遠い国・日本の中国系人

176

歴史上および戦後の中国系人／176
在日中国系人の現状と阪神大震災／178

2 「中国系の世紀」と日本

183

「アジア太平洋の時代」と「中国系の世紀」／183
日中米の三つのシナリオ／187

●刊行にあたって 194

●執筆者紹介 196

序章

● アジアの時代における中国系人と日本

世界文明の中心としてのアジア、その中心中国と日本

かつてアジアは世界文明の中心だった。少なくとも一五〜六世紀頃のアジアの交易圏は世界の交易の中心だった。ヨーロッパ人はアジアの特産物である絹、木綿、茶、砂糖、陶器、磁器など（「複合特産」という）を求めてアジアにやってきた。当時、世界中の船がこの交易圏に集まってきた。それがヨーロッパ人の生活革命をもたらし、さらにはこうしたアジアへの依存から「脱亜」するために産業革命、物質文明、資本主義の発展に至ったのである。

当時、アジアの交易では中国が大きな役割を果たしたが、封建王朝の中国は対等の貿易を認めず、朝貢貿易のかたちをとった。中国の朝廷に臣下として貢物を献上し、そのかわりに物を下賜されるというかたちでの物の交換が行われた。ここでは沖繩（当時琉球）が大きな役割を果たしたことはよく知られている。沖繩が日本その他に多くの中国産物をもたらしたのである。

一方、日本は当時世界でも一、二位を争う金銀産出国として、もともと豊かな国の一つであった。スペインが新大陸、とくに中南米に侵入し、インカ文明を滅ぼすとともに、大量の銀をヨーロッパにもち帰ったことはよく知られている。このため、ヨーロッパではインフレが起こったといわれるほどの量であった。

ところが、マルコポーロによって「金のなる木」が生えている国、「黄金の国・ジパング」としてヨーロッパにまで紹介された日本も大量の金銀を産出した。当時、国富はGNPによってではなく、金銀保有量によって測られた。一六世紀から一七世紀初め、室町時代の戦国末期と安土桃山時代の日

本は、この基準からして世界一、二位を競う経済大国であった。したがってアジア交易圏でも多くの物産を買った。とくに生糸、絹織物、砂糖が三大輸入品だった。

こうした海外交易が日本人の生活革命をもたらし、それがそれまでは中国文明の亜流とみられていた日本に、新しい独自の文化、日本文化（「徳川文明」と呼ぶ人もいる）をもたらしたのである。だが、金銀が枯渇するとともに、日本は自活の道を選ばざるをえなくなった（以上の点については浜下武志・東大教授、川勝平太・早大教授などの研究に学ぶものであるが、ここではとくに角山栄『アジアのルネッサンス』〔PHP研究所、一九九五年〕に負うところが大きい）。

その後、日本を除き中国を含めたアジアは欧米資本主義諸国の植民地経済（中心に対する周辺）に転落する。第二次大戦後、各国は政治的には独立したとはいえ、経済的には世界の辺境の地位にあらた。冷戦がいつそうそれに拍車をかけ、アジア諸国・地域は対立していた。ところが、ここに来て冷戦体制は崩壊しはじめ、アジア諸国の経済的發展が目覚ましくなった。アジアは世界経済の成長センターとなった。アジアが再び世界経済の中心となりうる時代など、かつては考えられもしなかったことが今日、話題となりはじめたのである。ただし終章で述べるように、日本を除けばアジアが世界の中心になりうるとしても、それはまだだいぶ先のことだが。

日本のアジア理解と華僑・華人

ある調査によると、日本の外国に関するテレビ番組（報道番組を含む）中、アメリカにかかわるものが五〇％ほどを占める一方、アジアは中国、東南アジア、NIEsなど、全部を合わせても二五％